

# 夜鳥

楠山正雄

青空文庫



ある時<sup>とき</sup>天子<sup>てんし</sup>さまがたいそう重<sup>おも</sup>い不思議<sup>ふしぎ</sup>な病<sup>やまい</sup>におかかりになりま  
 した。なんでも夜中<sup>よなか</sup>すぎになると、天子<sup>てんし</sup>さまのおやすみになる紫<sup>し</sup>  
 宸<sup>しい</sup>殿<sup>でん</sup>のお屋根<sup>やね</sup>の上になんとも知<sup>し</sup>れない気味<sup>きみ</sup>の悪い<sup>わる</sup>声<sup>こえ</sup>で鳴<sup>な</sup>くもの  
 があります。その声<sup>こえ</sup>をお聞<sup>き</sup>きになると、天子<sup>てんし</sup>さまはおひきつけに  
 なって、もうそれから一<sup>ひと</sup>晩<sup>ばん</sup>じゅうひどいお熱<sup>ねつ</sup>が出て、おやす  
 みになることができなくなりました。そういうことが三日<sup>みつ</sup>四日<sup>よっか</sup>と  
 つづくうち、天子<sup>てんし</sup>さまのお体<sup>からだ</sup>は目<sup>め</sup>に見<sup>み</sup>えて弱<sup>よわ</sup>って、御食<sup>おんじ</sup>事<sup>じ</sup>《おし  
 よくじ》もろくろくに召<sup>め</sup>し上<sup>あ</sup>がれないし、癩<sup>かん</sup>ばかり高<sup>たか</sup>ぶって、見<sup>み</sup>

るもお氣きの毒どくな御容態ごようたいになりました。

そこで毎まい晩ばん御所ごしよを守まもる武士ぶしが大おおぜい、天子てんしさまのおやすみに  
なる御殿ごてんの床ゆか下したに寝ねずの番ばんをして、どうかしてこの妖あやしい鳴なき  
声こえの正しようたい体たいを見届みとどけようといたしました。

するうちそれは、なんでも毎まい晩ばんおそくなると、東ひがしの方ほうから一ひと  
むらの真まつ黒くろな雲くもが湧わき出だして来きて、だんだん紫宸殿ししいでんのお屋根やね  
の上うへにおおいかかります。やがて大きなつめでひっかくような音おと  
がすると思おもうと、はじめ真まつ黒くろな雲くもと思おもわれていたものが急きゆうに恐おそ  
ろしい化ばけもの形かたちになつて、大きなつめを恐おそれ多くも御所ごしよのお  
屋根やねの上うへでといでいるのだということがわかりました。

しかしこうして捨すてて置おけば天子てんしさまのお病やまいはいよいよ重おもくな

つて、どんな大事だいじにならないとも限りかぎません。これは一日いちにちも早くはやこの怪あやしいものを退治たいじして、天子てんしさまのお悩みなやを鎮しずめてあげなければならぬといふので、お公卿くげさまたちがみんな寄よつて相談そうだんをしました。

なにしろそれにはなに一つし損そんじのないように、武士ぶしの中でも一番ばん弓矢ゆみやの技わざのたしかな、心こころのおちついた人をえらばなければなりません。あれかこれかと考かんがえてみますと、さしあたり源みなもと頼よりまさりまさの外ほかに、この大役たいやくをしておおせるものがございませぬ。そこそで相談そうだんがきまつて、頼政よりまさが呼よびだされることになりました。どうして頼政よりまさがさういふ名譽めいよを担になうようになったかと申もうしますと、いったいこの頼政よりまさは、あの大江山おおえやまの鬼おにを退治たいじした頼らいこ

光には五代めの孫に当たりました。元々武芸の家柄である上に、生まれ付き弓矢の名人で、その上和歌の道にも心得があつて、礼儀作法のいやしくない、いわば文武の達人という評判の高い人だったので。

二

頼政は仰せを承りますと、さつそく鎧胴の上に直垂を着、烏帽子を被つて、丁七唱、猪早太という二人の家来をつれて、御所のお庭につめました。唱には雷上動という弓に黒鷲の羽ではいた水破という矢と、山鳥の羽ではいた兵

破はという矢やを持たせました。早太はやたには骨食ほねくいという短刀たんとうを懐ふところに入れてもたせました。

ちようど五月雨さみだれが降ふつたり止やんだりいつもうつとうしい空そらのころで、夜よるになるとまつくらで、月つきも星ほしも見みえません。その中なかであやしい黒くろい雲くもがいつどこからわいて来くるか、それを見定みさだめるのはなかなかむずかしいことでした。するうち夜中よなぢら近かくなると、いつものとおり東ひがしの空そらからその黒くろい雲くもがわいて来きたものと見みえて、天て子んしさまは、おひきつけになつて、おこりをおふるい出だしになりました。

頼政よりまさは黒くろい雲くもが出でてきたようだとは思おもいましたが、一いっしよめにまつくらな空そらの中なかで、何なにが何なんだかさっぱりわかりません。一いっしよ生しよ

懸命心うけんめいしんの中で八幡大神はちまんたいしんのお名なをとえながら、この一の矢やを射損いそんしたら、二の矢やをつぐまでもなく生きては帰かえらない覚悟かくごをきめて、まず水破すいはという鑓矢かぶらやを取とつて、弓ゆみに番つがえました。するうちだんだん紫宸殿ししいでんのお屋根やねの上うへが暗くらくなって、大きな黒くろい雲くもがのしかかつて来きたことが闇夜やみやにも見分みわけがつくようになりまし  
たから、ここぞとねらいを定さだめて、その雲くもの真まん中なかめがけて矢やを射いこみました。やがて鑓矢かぶらやがぶうんと音おとを立てたてて飛とんで行きま  
すと、確たしかに手たごたえがあつたらしく、急きゆうに雲くもが乱みだれはじめ、  
中ちゆうから、

「きやツ、きやツ。」

と鶴ねえのような鳴なき声こえが聞きこえました。

一の矢やがうまく行つたので、頼政よりまさはすかさず二の矢やに兵破ひょうはという鏑かぶら矢やを射いかけますと、こんども正まさしく手てごたえがあつて、やがてどしんと何かなに重いおもものが、屋根やねの上うへにおちたと思おもうと、ころころところげて、はるかな空そらからお庭にわの上うへまでまつさかさまにおちて来きました。家来けらいの唱となうが、

「すわこそ。」

と駆かけ寄よつて、ばけものを押おさえますと、早太はやたがあずかつていた骨食ほねくいの短剣たんけんを抜ぬいて、ただ一突ひとつきにしとめました。

頼政よりまさが首尾しゆびよくばけものを退治たいじしたというので、御殿ごてんは上うへを下したへの大騒おおさわぎになりました。たいまつをとぼし、ろうそくをつけて正しょうた体たいをよく見みますと、頭あたまはさる、背中せなかはとら、尾おはきつ

ね、足はたぬきという不思議なばけもので、鶴のような鳴き声を  
 出して鳴いたことがわかりました。ばけもののむくろはすぐに焼  
 いて、清水寺のそばの山の上に埋めました。

鶴が退治られてしまいますと、天子さまのお病はそれなりふき  
 とつたように治ってしまいました。天子さまはたいそう頼政の  
 手柄をおほめになつて、獅子王というりっぱな剣に、お袍を一  
 重ね添えて、頼政におやりになりました。大臣が剣とお袍  
 を持つて、御殿のきざはしの上に立つて、頼政にそれを授けよ  
 うとしました。頼政はきざはしの下にひぎをつけてそれを頂こ  
 うとしました。その時もうそろそろ白みかかしてきた大空の上  
 を、ほととぎすが一声三声鳴いて通つて行きました。大臣が

聞いて、

「ほととぎす

名をば雲井に

あぐるかな。」

と歌の上の句を詠みかけますと、

「弓張り月の

いるにまかせて。」

と、頼政があとをつづけました。

なるほど評判の通り、頼政は武芸の達人であるばかり

でなく、和歌の道にも達している、りっぱな武士だと、天子さま

はますます感心あそばしました。

三

頼政よりまさはその後のちずっと天子てんしさまに仕つかえて、度々たびたびの戦いくさにいろい  
 ろ手柄てがらをたてました。けれどどういものか、あまり位くらゐが進すすまな  
 いで、いつまでもただの近衛このえの武士ぶしで、昇しやうでん殿でんといつて、御殿ごてん  
 の上のぼに上のぼることを許ゆるされませんでした。それである時とき、

「人知ひとしれぬ

おおうちやま

大内山おおうちやまの

やまも

山守やまもりは

木こがくれてのみ

月を見<sup>み</sup>るかな。」

という歌<sup>うた</sup>を詠<sup>よ</sup>みました。そしてせつかく御所<sup>ごしよ</sup>に仕<sup>つか</sup>えながら低<sup>ひく</sup>い位<sup>くらいつず</sup>に埋<sup>う</sup>もれていて、人にもしられずにいる山守<sup>やまも</sup>りが高<sup>たか</sup>い山の上<sup>のうへ</sup>の月をわずかに木<sup>こ</sup>の間<sup>ま</sup>から隙<sup>す</sup>き見<sup>み</sup>するように、天子<sup>てんし</sup>さまの御殿<sup>ごてん</sup>を仰<sup>あお</sup>いでばかり見<sup>み</sup>ているという意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>を歌<sup>うた</sup>いました。天子<sup>てんし</sup>さまはその歌<sup>うた</sup>をおよみになつて、かわいそうにお思<sup>おも</sup>いになり、頼<sup>より</sup>政<sup>まさ</sup>を四<sup>し</sup>位<sup>い</sup>の位<sup>くら</sup>にして、御殿<sup>ごてん</sup>に上<sup>のぼ</sup>ることをお許<sup>ゆる</sup>しになりました。

それからまた長<sup>なが</sup>い間<sup>あいだ</sup>、四<sup>し</sup>位<sup>い</sup>の位<sup>くら</sup>のまますてて置<sup>お</sup>かれていたので、  
こんどは、

「上<sup>のぼ</sup>るべき

たよりなければ

木のもとに

しいを拾ひろいて

世よを渡わたるかな。」

とうたつたので、とうとうまた一つ位くらゐがのぼって三位さんみになり、  
源三げんざん位み頼政よりまさと呼ばよれることになりました。

# 青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 鵲

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>